

尖閣での中国の脅威から目を背けるな

シリーズ

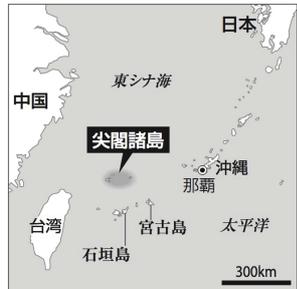
日本が危ない!

武力の牙を向け始めた中国
尖閣へ中国海軍改造船投入

「警察や海上保安庁の対応が困難な場合は、自衛隊が対応するのが原則だ」

「中国が派遣する軍艦の数は自衛隊の比ではない」

この言葉の応酬は、スパイ映画や軍事小説などのくぐりではない。今年に入り、日本と中国の間で現実交わされたやりとりだ。前者は防衛相、中谷元の1月12日の発言。後者は中谷の発言を受けて中国共産党の機関紙、人民日報系の「環球時報」が翌13日に



掲載した社説の一節だ。

攻防の舞台は東シナ海。日本固有の領土である尖閣諸島(沖縄県石垣市)の周辺海域は、昨年未から、これまでにない緊張に包まれている。

12月26日午前9時半すぎ、尖閣周辺の日本領海内に中国海警局所属の船3隻が相次いで侵入し、約1時間10分航行した。中国当局の船が日本の領海に進入するのはこの年、35日目。しかし、この日は今までとは大きく異なる点が確認された。3隻のうち1隻が機関砲のようなものを搭載していたのだ。

産経新聞のウェブサイト「産経ニュース」によると、中国の軍事情報を伝える香港の人権団体「中国人権民主化運動センター」は、中国の3隻のフリゲート艦が改造成を終え、他に2隻の駆逐艦が改造成中で、計5隻が尖閣海域に投入される可能性があること明らかにしている。さらに、同サイトに掲載された写真を見ると、2014年1月に撮影された中国海軍のフリゲート艦「539安慶号」と、尖閣周辺に出没する中国海警の「海警31239」とが瓜二つであることが分かる。

尖閣の日本領海に進入した船が、中国海



※写真＝尖閣諸島の領海周辺を徘徊している中国海警の「海警31239」。海軍のフリゲート艦を転用、改造した船として注目されている(提供：第十一管区海上保安本部)

軍の改造船であることは、もはや疑いようがない。中国はいよいよ、「武力」の牙を尖閣に向け始めた。

『一発接触』の緊張状態 尖閣「目の前にある危機」

尖閣諸島の日本編入が閣議決定されたのは121年前の1895(明治28)年1月14日。それ以降、アホウドリの羽毛の採取や軽筒の製造などに従事する人たちが続々と移住し、最盛期には約200人の日本人が居住していたという。一方、中国が尖閣の領有権を主張し始めたのは1970年代からだ。近年は現場海域で中国船が公然と日本人の漁業活動を妨害する事態が日常化している。

「領海内で地元漁船追尾～尖閣周辺の中国公船」一尖閣を含む八重山諸島を中心に発行している日刊紙「八重山日報」の昨年10月10日付1面トップにこんな見出しが躍った。

「石垣市議の仲間均氏らが漁船『高洲丸』で尖閣諸島海域に出漁し、帰途についた9日、日本領海内で、領海侵犯した中国海警の船『海警2112』『海警2401』に追尾された。中国公船が途中で追尾をやめたため、高洲丸は無事、石垣港に戻った。八重山の漁業者が尖閣海域で中国公船に脅かされている実態が改めて浮き彫りになった」…記事はこう報じている。

仲間のブログによると、今年1月14日、石垣市で「尖閣諸島開拓の日を祝う宴」が開かれた。尖閣が正式に日本領となった日にあわせて毎年開かれていたこの会合で、仲間は次のようにあいさつした。

「最近では、中国公船は機関砲を搭載し、尖閣諸島周辺海域で領海侵犯を繰り返しており、『一発接触』の緊張した状態が続いております。中国は尖閣諸島に最も近い陸地に軍事拠点を整備しており、尖閣諸島から300キロ近海のナンキ列島にレーダーや滑走路も整備するなど、尖閣諸島を含む防空識別圏の監視を強化する狙いがあると見られています」

八重山の人々にとっては、中国の脅威はまさに目の前にある危機にほかならない。そして、尖閣の危機は日本全体の安全と平和を脅かす深刻な現実なのだ。

中国軍艦の領海侵入に自衛隊派遣 尖閣に強硬策、真の狙いは南沙か

覇権主義的な海洋進出を押し進める中国が早晩、尖閣をターゲットに「武力」を振りかざしてくることは、日本政府も想定していた。

政府は昨年5月14日、「我が国の領海及び内水で国際法上の無害通航に該当しない航行を行う外国軍艦への対処について」とする文書を閣議決定した。外国軍艦が中国海軍の軍艦を想定していることは、言うまでもない。

重要なのは、この決定の中に明記された「事態への対処」という項目。少し長くなるが引用する。

「政府は、我が国の領海及び内水で国際法上の無害通航に該当しない航行を行う外国軍艦に対しては、国際法に従って、我が国の



※写真＝尖閣諸島の南小島。国有化した3島のひとつで、切り立った岩山と対照的な平地から構成されている。魚釣島から約5キロ離れている(提供：国土地理院)

領海外への退去要求等の措置を直ちに行うものとし、いかなる不法行為に対しても切れ目ない十分な対応を確保するとの観点から、当該措置は、自衛隊法第82条に基づき海上における警備行動を発令し、自衛隊の部隊により行うことを基本とする(後略)

冒頭に紹介した中谷の発言は、まさにこの決定に沿って、「中国軍艦が尖閣周辺の日本領海に進入すれば、海上警備行動を発令して自衛隊の艦船を派遣する」と警告しているのだ。

こうして見ると、尖閣を含む東シナ海が開戦前夜の雰囲気にも包まれていると思われそうだが、必ずしもそうではない。

日本政府が「尖閣の守り」に万全を期すのは当然だが、中国側の本意は別にありと解説するのは、全国紙の防衛担当記者だ。

「中国指導部の関心は東シナ海よりも、むしろ南シナ海にあります。中国に加え、フィリピン、台湾などが領有権を主張する南沙(英語名・スプラトリー)諸島の領有権問題です。南沙をめくっては関係国が多いため、米国など国際社会の注目度が高い。尖閣周辺の強硬姿勢には、少しでも南沙から目をそらせたいという意図がうかがえます」

加えて、昨年11月にマレーシアで開かれた東アジアサミット(EAS)では、「緊張を生む行動を厳に慎む」ことを中国を含む参加18カ国が合意している。この合意をリードしたのは首相、安倍晋三だった。「南沙のカタキを尖閣」という意図も、中国にはあるのでしょうか(前出の全国紙記者)

尖閣をめぐる日中の攻防は、外交面でも激しさを増している。

尖閣問題を伝えない知事 八重山と危機感共有せず

尖閣の危機を考えると、現在の沖縄が抱える「悲しい現実」にも触れなければならぬ。以下は、中国の脅威を日々、直接感じている八重山諸島の住民たちの嘆きだ。

「前知事(仲井真弘多)は八重山にも頻繁に足を運んでくれたんですが…。今の知事(翁長雄志)は米国やスイスにはすすんで出張するのに、離島に対する目配りがいいのではありませんか。こうため息をつくのは、八重山日報編集長の仲間誠だ。

石垣市議会は昨年9月、「中国の一方的な領有権主張により、尖閣諸島周辺海域での自由で安全な漁業活動が侵害されている」とする意見を議決した。市議会がわざわざ、こんな言わずもがなの意見書を議決したのは、翁長がこの直後にスイス・ジュネーブの国連人権理事会で演説することが予定

されていたからだ。だが、「国連の場で知事に尖閣の危機を訴えてほしい」という願いは叶わなかった。ジュネーブで取材した仲間誠は「知事の演説に、『尖閣』の2文字はありませんでした」と振り返る。

翁長といえば、米軍普天間飛行場(野野湾市)の名護市辺野古への移設反対を訴えている。基地反対を掲げる知事としては、尖閣での中国の脅威がクローズアップされ、普天間を含む米軍基地の重要性が高まることは、不都合なことなのだろう。

仲間誠によると、翁長が離任後、今のところ唯一、八重山諸島を視察に訪れた際、ある石垣市議が知事に面会した。尖閣の危機を直談判するためだ。市議の話聞いた翁長は「私も保守だから気持ちは分かる。だけど、冷静になるべきだ」と答えたという。仲間誠は「今の知事は、離島に関する危機感を共有しない」と批判する。

中国従属の「龍柱」完成 沖縄尖閣の「内なる敵」

翁長のこうした不作為が、地元の失望と悲しみを招いている。しかし、尖閣問題に関する翁長の「罪」はこれだけではない。

中国の「武装船」が尖閣に押し寄せた3日後の昨年12月29日、沖縄の海の玄関口・那覇港から延びる大通り沿いに、龍の頭をかたどった巨大な2体の建造物が完成した。高さ約15メートル、幅約3メートル。「龍柱」と呼ばれるボール状の装飾柱だ。

龍柱の建設は翁長肝いりの事業だ。那覇市長を務めていた2012年、中国・福州市との友好都市締結30周年を記念し、計画された。総事業費は3億2200万円。産経新聞によると、翁長は当時の市議会で「龍柱をシンガポールのマリーオンに匹敵するようにしたい」と意気込みを語っていた。

龍柱はもともと、中国皇帝の権威の象徴とされる。中でも「5本爪」の龍は皇帝だけに許された。朝鮮などの冊封国には「4本爪」の龍の使用のみが認められた。そして今回、那覇市に完成した龍柱は「4本爪」だった。

中華思想に基づく龍柱の謂われを翁長は知っていたのだろうか。翁長は10月5日の県議会一般質問で、「首里城にも龍がある。もし(龍柱が)中国のものならば、あの時代から沖縄は中国のものだと言われてもしょうがないという話になる。アジアの国々ときあう中から生まれた、沖縄独自の文化だ」と説明した。

今や世界有数の軍事大国となった隣国の主権侵害には見ぬふりをし、その大国のかつての栄光を象徴する文化遺産を受け入れ、「尖閣の平和と安全を守る」と考える人々にとっては、翁長の言動はまさに、「内なる敵」としか映らないだろう。(敬称略)